

蒲田行進曲

つかこうへい

蒲田行進曲

つかこうへい

蒲田行進曲

つかこうへい

発行者／角川春樹 印刷所／大日本印刷 製本所／宮田製本
発行所／角川書店

東京都千代田区富士見2-13
〒102 振替東京3-195208
TEL 東京265-7111 (大代表)

昭和56年11月30日 初版発行
昭和57年2月10日 4版発行



0093-872331-0946(0)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

The Students March Song by Dorothy Donnelly©1924.1950
Warner Bros.Inc.

Rights for Japan administered by Nichion.Inc.

日本音楽著作権協会 (出) 許諾第8113477号

蒲田行進曲・目次

ヤスのはなし

五

小夏のはなし

九三

装
丁
和
田
誠

蒲田行進曲

ヤスのはなし

I

スタジオの中は、うだるような暑さだ。頭の上から十キロワットの照明が三十台もギラつき、天窗も通気孔もなく、鉄の扉を閉めると空気は淀んだまま流れようもない。

衣裳はぐっしり汗を吸いこみ、体が倍くらいに重くなっていた。羽織の裾から汗がポタポタしたたり落ちて、足元のコンクリートに黒い水たまりをつくっている。

俺たち大部屋は、スタッフの打ち合わせの間、スターさんのように外に息ぬぎにできるもできず、暗がりにひとかたまりになって、じっと待っている。

「土方歳三^{ひじかたとしぞう}、準備OKですね」

「よろしくおねがいます」

浅黄色のんだら模様の羽織に、額には「誠」の鉢巻^{はちまき}きを締めた銀ちゃんは、初の主演作品ということもあって、神妙な顔つきであちこちに深々と頭を下げた。銀ちゃんのはじめての主演作品だ。俺たちもがんばんなきゃあ。

「大部屋さんたち、用意OKですね」

「OKです!!」

俺たちだってプロだ、映るか映らないかの斬^きられ役でも、スターさんなりに顔だけは決して汗をかきはしない。

「じゃ、本番行こうか」

おっとりした大道寺監督^{だうどうじ}の声をうけて、助監の昭ちゃんが、

「カメラ回りました!」

ヒステリックに叫ぶ。

反射的に俺たちは目と左腕をさわる。っていうのは、眼鏡と腕時計なんだ。これも習性で、

昔、腕時計したまま刀ぬいて立ち回りやった大部屋さんがいて、編集の段階で大騒動になり、その大部屋さんは首つたつて話があるんだ。わかるよ。撮り直しつてことになって、場面^{シーン}しだいじゃ四、五十人からのスタッフと日だて何十万つてスターさんたちのスケジュール調整のこと考えたら、首くくりたくもなるよ。それに、それだけの人を集めても、空模様とかで、一分のカット撮るのに一日じゃすまないつてことだつてあるんだからね。

居酒屋ののれんが割れる。坂本龍馬役の橋^{さぶもとりょうま}さんがひょっこり顔を出す。

さすがスターさんだ。照明は変わらなくても、場が一段と明るくなつたようだ。

「いたいた、さがしたぞ、総司^{そうじ}！ あんまりつれなくするもんじゃないぞ。ワシの心はデリケートにできとんじゃ」

上半身裸で、煮しめたような色の、ぞろつとした袴^{はかま}をつけた橋さんが、不精ひげいっぱい顔に狂つたみたいな笑いを浮かべる。

「なっ、悪いことは言わん、一発やらせろ、肺病持ち、やらせろ、わしや、がまんできんがな」

「もう、僕のあとを追うのはやめて下さい」

総司役のジミー雪村は、ふところに手を入れられ、真っ赤になっている。

「ほう、赤うなつて、ウブじゃのう」

セットの板べいの陰でスタンバイしていた俺も背筋がゾクツとした。橘さんの声は、一昨年おととしの映画の賞を総ざらいした「寝盗られ宗介」で、將軍の奥方を寝盗る歌舞伎役者を演った時を彷彿とさせた。色気というか狂気というか……。普段はごく普通の人で、胸ポケットに一粒種の男の子と家族でドライブ行つたときの写真を入れていて、会う人ごとに見せるんだ。ジミーも、衆道の沖田という設定で役づくりをしてきたんだろう、龍馬に二の腕をつかまされて、必死に振りほどこうとしながら手足バタバタさせ、目に涙をため歯をくいしばっている。

「坂本さん、あなた衆道の気があるんですか」

「おお、わしぐらいになつたら何でもあるんじゃない」

「やめて下さいよ、人が見てるじゃありませんか」

「ぬしが一発やらせなきゃ、わしや日本ほつたらかしにするぞ、日本救いたきゃわしのものになれ」

突然その龍馬がさつと顔を上げ、厳しい目をつくり、奥の座敷に向かって怒鳴る。

「誰じゃい、そこに隠れとんのは！ 出てこい！」

座敷のふすまが開いてカメラがパンすると、いよいよ銀ちゃんの登場だ。

——下唇をかみ、左の目を少し細めた、銀ちゃんがいる。俺も、思わず銀ちゃんの気持ちになつて龍馬を睨みつけた。

「だれじゃおぬしは!!」

まだ銀ちゃんはかみつきそうな顔で、カメラを睨みつけている。どう芝居のリズムがこわれようと、じつくりアップを撮ってくれるまでは、台詞を吐くまいと心に決めてるようだ。

とうとう橘さんが業を煮やして、

「だれじゃと聞いとんじゃ。カッコつけず答えんかい!!」

「私は、新撰組の……」

「新撰組はわかちよる、その派手なだんだら模様の羽織着てりやあよ」

橘さんはおさえこむような言い方をする。でも銀ちゃん、気にすることなく、ますます鼻の穴をふくらませ、カメラを睨みつけている。正直な話、相手との関係とか、芝居の呼吸な

んて考え出したら、映画じゃどんな脇にまわることになる。主役はふんぞりかえってりや、まわりの芸達者が芝居やってくれるもんなんだ。

「土方歳三です」

見下したその言い方に橘さんは、目をカッと見開いて大声で応える。

「おまえ、評判悪いぞ。若い者先に立たして、自分だけ生き残ろうって魂胆だろうが、そうはいかんど。おまえが先頭に立て、相手してやるけん」

「ひと太刀^{たち}交えますかな」

「きいた風な口ぬかすな！ やれー！」

それを合図に俺たち脱藩浪士が切りかかる。立ちまわりが始まって、銀ちゃんはカメラを睨みつけたまま、俺たちを見ようとしなない。銀ちゃんが振りまわす刀に、俺たちが体あわせて斬られてくって感じ。俺たちは、カメラの前を横切らないよう、銀ちゃんの殺陣がきれいに見えるよう、蝶のように舞わせて蜂のように刺される感じよ。

「カーッと！」

という声が聞こえても、俺たちは起き上がらず、監督の「OK！」という声を待つ。恐い

んだよね、この一瞬が。たとえ俺たちのせいじゃなくても、撮り直しってことになると、責められるのは大部屋の俺たちだからね。

「おつかれさん、昼から十八シーンいきます！ 十三時開始です」

ホッとして立ち上がろうとした瞬間、

「ヤス、きさま、カメラの前横切りやがったな。ぶちこわしじゃねえか」

銀ちゃんの声がして、脳天のうしろのどこ、ガツンときたね。あんまり痛くて目の中ピカッと稲妻が走ったよ。

「申し訳ありません、申し訳ありません」

もう慣れっこだからさ、俺、背中丸めてうずくまって殴られるままよ。

「また始めやがったよ、大部屋いびりを」スクリプターの飯田さんの声が聞こえた。

「銀さまのアップばかりで、斬られ役の大部屋連中なんか映っちゃいねえのによ」

銀ちゃんはおかまいなしに激しく殴りつけてくる。しまいには、

「このゲスが、そんなに目立ちたいか」

こぶしで俺の顔、ガンガン殴り始めた。もう目が真っ赤に充血しちゃってるのね、正気の

沙汰^{さた}じゃなくなってる。肩甲骨の間のとこなんか刀がもろに当たったりすると、小便がもれそうに痛いよ。思わず声をあげそうになるけど、銀ちゃんは、なにか考えがあってやっていることだろうし、出方をみるまで我慢しなきゃあ。

「この場面は俺のアップ撮ってんだ。それをてめえの汚ねえ面なんか映してどうすんだよ」

この十年、スターさんのじゃまにならないように、うまく斬られることばかり考えてきてるんだ。そんなへマやりはしないよ。それに俺たち、あとまだ何度も捕り方やったり、町人やったりしなきゃいけないんだから、そうそう早いうちから映ってられないんだよ。でも銀ちゃんが怒ってんだしね、調子あわせなきゃ……。

「すいません、すいません」

「撮り直すのにいくらかかると思ってるんだ、弁償できるのか!!」

ようやく大道寺監督がなかに入ってくれて、

「大丈夫だよ、銀ちゃん。その大部屋さん、きつとフレームに入っちゃいなかったよ」

「いえね、監督さん、こいつが映りたい一心で、わざとらしくカメラの前で倒れたんです

よ。ほんとにやりにくいんですよ、こいつらがチョロチョロ映りたがって。どうします、撮り直しますか」

「まあラッシュ見てみようよ。セットだってバラし始めてんだしさ」

銀ちゃんはひとつ舌打ちして、

「セットなんか作り直しゃいいじゃないですか。困るなあ、テレビあがりは、手エぬくことばかり考えて」

銀ちゃんは、テレビあがりと言われてムツとした表情の監督を無視し、時田カメラマンに相槌^{あいづち}をもとめた。

「ね、時田さん、そうでしょう、フレームに入ってましたよね。ほら、今の袈裟懸^{けさが}けのシーンですよ。俺が胴を払って、一発決めといて、そのあとグッと寄るつもりだったのが、そこをこのヤスの顔がヌツと出てきちゃったもんだから、台なしになっちゃったんだよ。チキショウ」

そして、また俺の腹を力いっぱい蹴^けり上げてきた。

スタジオの入口でマネージャーと打ち合わせをしてたらしい橘さんが、

「もし映ってた俺もう一回やり直してやるからよ。おまえ主役なんだろうが、細かいとこ、あんまり気にするな」

「しかし、大部屋は言ってやんなきゃわかんないですよ」

「だけど、もう一回おまえの臭い芝居につき合うってのやりきれんしなあ」

橘さんは銀ちゃんより歳は若いんだけど、はじめての主役の銀ちゃんと違ってもう何本も主演してるから、格としては上なんだよね。

「どうした、銀の字。あんまり、ゴチャゴチャ言うのみつともないぞ」

スタジオを出ていく橘さんの後ろ姿を睨みつけ、銀ちゃんはくやしそうに俺にツバを吐きかけた。

いつのまにか、スタッフもキャストも、みんな休憩で散ってしまつて、ガランとした蒸し暑いスタジオに残ったのは、銀ちゃんと俺たち大部屋連中と、セットの見取り図を見ている監督だけになった。

「で、監督、本当のところを聞かせてもらいましうか。この映画は、この倉丘銀四郎くらおかぎんしろうが主役なんですか、それとも橘なんですか」